

京都大学	博士（工学）	氏名	平田 晃久
論文題目	生命論的建築の研究－〈からまりしろ〉の概念をとおして－		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、21世紀の環境の時代にふさわしい新しい建築の可能性を「生命論的建築」という論点で提示し、現実の建築設計のプロセスと作品を通して、具体的な設計概念として働く〈からまりしろ〉の概念とその設計原理の有効性を実証的に研究した成果をまとめたものである。特筆すべき点は、生命論的建築及び〈からまりしろ〉という仮説的概念が、数々の建築賞を受賞し高く評価されているオリジナルの建築設計を通して検証されていることである。</p> <p>第1章の序論は、研究の背景と目的、対象と方法、論文の位置づけと既往研究、論文の構成、各章のキーワードと建築作品の対応表をまとめている。</p> <p>第2章では、第3章で提示する〈からまりしろ〉という概念の基礎となる、「生命論的建築」という枠組みの3つ重要な論点として、①生命概念の拡張、②脱人間中心主義、③「はたらき」としての「かたち」、について考察している。</p> <p>第3章では、「生命論的建築」を設計するにあたって、思考の基礎を与える〈からまりしろ〉という独自の建築概念を提示する。人や出来事とかたちが関係することのできる余地を意味する〈からまりしろ〉は、階層構造をなしながら重層する、生きている世界の秩序に接続するような設計原理であるが、〈からまりしろ〉の特性としては①ニッチ性、②階層性、③他者性が重要であることを指摘している。</p> <p>第4章では、〈からまりしろ〉の単体的原理のうち、能動的側面、すなわち生成の原理について説明している。これはからまりを誘発する幾何学的特性を、遺伝子や種子のように扱って植物を育てるように建築をつくることを意味する。このような幾何学を「種（たね）としての幾何学」と名付け、建築設計の実例を通して、ひだ・ひも・ねじれという種の原理を含む幾何学の意味を明らかにするとともに、植物を育てるような建築設計のプロセスは、植物の種を「選択」する段階とその種を「成長」させる段階という2つの位相からなる進化的プロセスとして記述できることを示している。</p> <p>第5章では、〈からまりしろ〉の単体的原理のうち、受動的側面、すなわち変成の原理について説明している。〈からまりしろ〉は自然環境、特に風や水、熱や力といった様々な自然の流れをモデレートする存在であり、逆にその流れによって変成させられる存在でもあることを示すとともに、実際の建築設計のプロセスの実例を取り上げ、コンピューテーションを駆使した設計法を用いて、どのように風や水といった自然の流れとからみ合う建築が浮かび上がってくるかを明らかにしている。</p> <p>第6章では、単体的原理を超えて、〈からまりしろ〉の複合的原理について考察している。すなわち、①建築の内部構造に〈からまりしろ〉の階層構造を導入することによって、「階層的からまり」をつくることができる、②「階層的からまり」の要素は互いに他者性を持っており、互いに対して「偶発的なはたらき」を持つ、③〈からまりしろ〉の複合的原理は、不可逆の時間的プロセスの中に投入でき、「混成系」としての建築を生み出す可能性を持つ、さらに、④都市デザインや都市的規模の建築のデザインに〈からまりしろ〉の複合的原理を応用することができる、といった複合的原理の可能性を、生命論的建築の設計事例を通して実証的に説明している。</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	平田 晃久
<p>第7章では、建築家や建築家を中心とした狭義の設計グループを超えて、様々な分野の専門家や使用者を含む集合的な設計主体によるマクロな設計プロセスにおいて、設計案や個としての建築家が「バーチャルな〈からまりしろ〉」として働く事態に注目し、多数の主体の対話による生命論的設計プロセスの可能性について考察している。特に、設計主体を拡張していく実験的な試みとして、“太田駅北口駅前文化交流施設”、及び“陸前高田みんなの家”の設計プロセスを取り上げ、物質としての建築の形式や形態を超えて形成されるバーチャルな〈からまりしろ〉が、生命論的建築やコミュニティを生成する上で有効に働き得ることを明らかにしている。</p> <p>第8章では、「人間」という理知的な存在を「生命」という根源にまで遡ることによって、「記号圏」の中に位置づけて捉える「生命論的建築」や生命論的・即物的なアプローチを可能にする〈からまりしろ〉という概念が、最終的にどのように「文化」や「風土」といった意味の次元と交錯するかを論じている。特に、〈からまりしろ〉の概念が、空と大地の境界を形成する“地表面の在り方”や“東アジアの風土”などと深く結びついていることを指摘している。</p> <p>第9章の結論では、本論文で提示された「生命論的建築」や〈からまりしろ〉という概念が、様々な水準にわたって有効性を持つことを、各章を振り返りながら提示するとともに、今後の課題についてもまとめている。</p>			

氏名	平田 晃久
----	-------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、建築を「生きている」世界に属する存在として捉え直し、モダニズムの建築に代わる 21 世紀にふさわしい新しい建築の可能性を「生命論的建築」という論点で示すとともに、具体的な設計概念として働く〈からまりしろ〉の概念とその設計原理の有効性について、建築設計の実践を媒介として検証する「設計研究」を通して実証的に研究した成果をまとめたものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. モダニズムの建築を超える新たな建築概念として「生命論的建築」の概念を構想し、①生命概念の拡張、②脱人間中心主義、③「はたらき」を持った「かたち」という 3 つの論点から定式化した。
2. 「生命論的建築」を設計する手がかりとして、人や出来事とかたちがからまることのできる余地を意味する〈からまりしろ〉の概念を提示し、階層構造をなしながら重層する、生きている世界の秩序に接続するような建築の原理となる〈からまりしろ〉の特性としては、①からまりのニッチ性、②からまりの階層性、③からまりの他者性が重要であることを指摘した。
3. 〈からまりしろ〉の能動的な単体的原理として、からまりを誘発する幾何学的特性「ひだ」・「ひも」・「ねじれ」を種子のように扱い、植物を育てるように建築をつくる方法が、植物の種の「選択」とその種の「成長」という 2 つの位相からなる進化的プロセスとして記述できることを示した。また、〈からまりしろ〉の受動的な単体的原理として、〈からまりしろ〉が風や水、熱や力といった様々な自然の流れをモデレートする存在であり、逆にその流れによって変成させられる存在でもあることを踏まえて、コンピューテーションを駆使して、自然の流れとからみ合う建築を設計する方法を提示した。
4. 〈からまりしろ〉の複合的原理について、①建築の内部構造に〈からまりしろ〉の階層構造を導入して「階層的からまり」をつくる、②「階層的からまり」の要素は互いに「他者性」を持ち、相互に「偶発的なはたらき」を持つ、③不可逆の時間的プロセスの中に投入でき、「混成系」としての建築を生み出す、④都市デザインや都市的規模の建築のデザインにも応用できることを示した。
5. 様々な分野の専門家や使用者を含む集合的な設計主体によるマクロな設計プロセスにおいて、設計案や個としての建築家が「バーチャルな〈からまりしろ〉」として働く事態に注目し、多数の主体の対話による設計プロセスを通して、生命論的建築やコミュニティを生成する方法を提示した。
6. 生命の根源にまで遡り、「生命論的建築」や〈からまりしろ〉の視点から建築を捉え直すことが、最終的に「文化」や「風土」といった意味の次元、すなわち「記号圏」の広がりとも深く結びついていることを明らかにした。

本論文は、「生命論的建築」の可能性を示すとともに、〈からまりしろ〉という概念を提示し、建築設計の実践を通してその設計原理を解明したもので、学術上、実際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 2 月 22 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。